

【基本認識:持続的な発展を志向する都市経営の必要性】

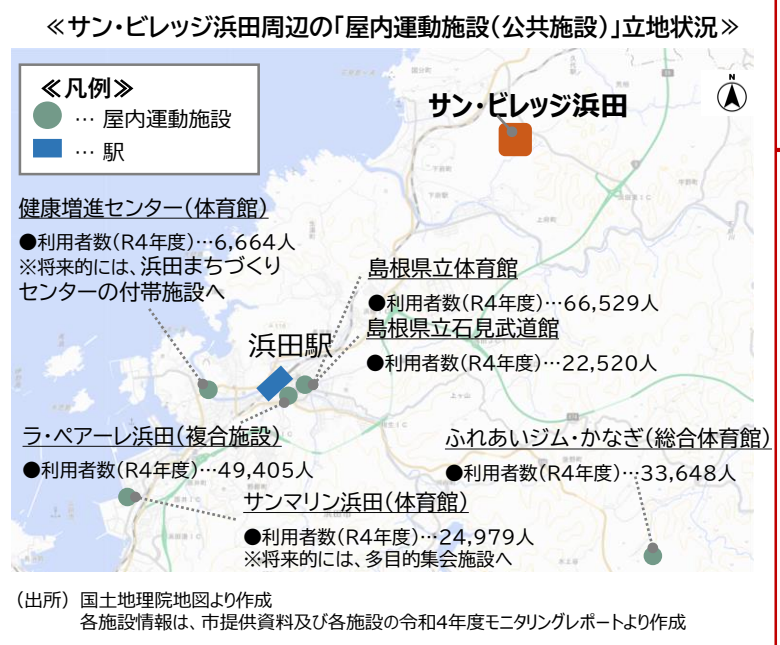
- 限られた都市経営資源(ひと・もの・かね・こと)を最大限生かしていくことが求められる
- 市民ニーズに応え、市民の便益・受益実感を高める施策が求められる
- 費用対効果を高め、中長期での財政負担の適正化に資する投資が求められる
- ファシリティマネジメント(施設経営)、施設設備の老朽化への対応が求められる

【検討の前提】

- 現在のサン・ビレッジ浜田の躯体はそのまま活用、必要になる最小限の設備更新・設備投資を実施
- スポーツ・アクティビティ(その他多様な活動)を中心に、若者や子育て世代など、より多くの市民の受益実感を高める機能を検討

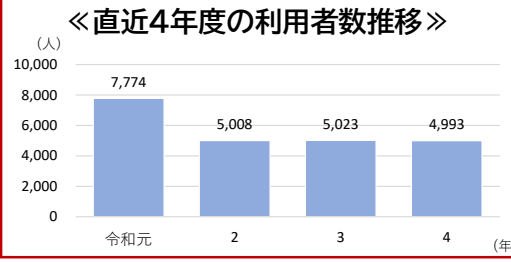
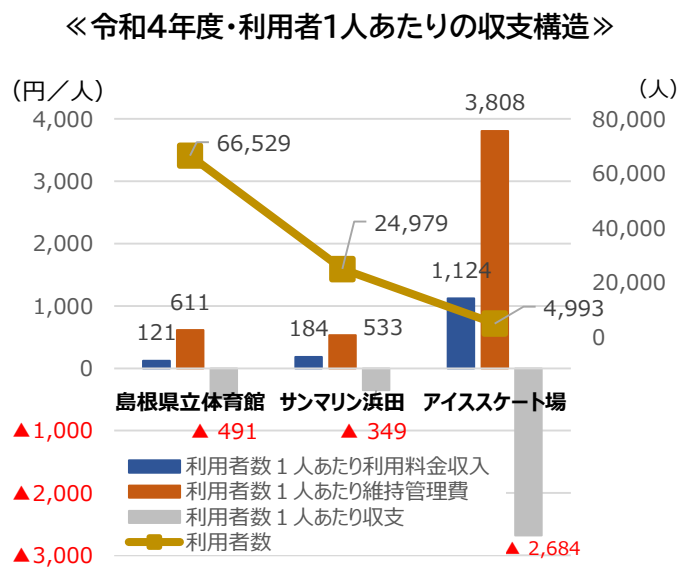
①外部環境の整理

- 人口動向は減少傾向にあり、今後さらに高齡化が進展。
- 全国のアイススケート場は減少傾向も、島根県内のアイススケート環境は一定以上確保されている。
- ほぼすべての市内屋内運動施設について稼働率が100%に近く、新規の屋内運動施設に対する潜在的な需要があると推察。
- アーバンスポーツの隆盛など、時代に応じてスポーツ種目は広がりを見せてきている。
- SDGsの推進や環境負荷軽減の社会的要請の高まりがある。



②内部環境の整理

- サン・ビレッジ浜田アイススケート場の利用者数は令和2年度以降横ばいで推移。令和4年度の利用者数は4,993人。
- 現施設は他スポーツ施設に比べて利用料金収入単価は高いが維持管理コストも大きく、他屋内施設に比べて大幅な赤字が発生する構造となっている。



③環境分析まとめ～サン・ビレッジ浜田の機能のあり方に関する主要論点

▼アイススケート場のSWOT※1分析

※1…SWOT: 事業の現状について、内部環境(強み<Strength>・弱み<Weakness>)と外部環境(機会<Opportunity>・脅威<Threat>)の4つの要素から把握し、より実現性の高い戦略やマーケティングに生かすワークフレーム

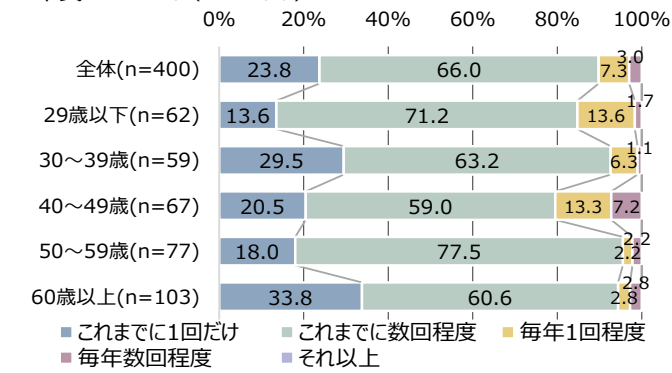
強み	弱み
<ul style="list-style-type: none"> ● 石見地方唯一の施設(県内では唯一ではない) ● 屋内施設であること(天候に左右されない) ● 高速道路からのアクセスの利便性 ● 高い市外利用率(ただし、人数、経済効果は極めて少なく、限定的) ● サン・ビレッジ浜田スポーツ広場の隣接、拠点性(サッカー、地域プロスポーツ振興の萌芽)など 	<ul style="list-style-type: none"> ● 設備の老朽化(エネルギー効率の悪さ)、更新投資が必要 ● カーリング以外の公式戦ができない規模感 ● 市民のスポーツ・レクリエーション施設としての存在感の薄さ ● より持続的な収支構造への対応 ● 市民利用のアクセスの不便さ ● 厳しい事業環境、運営事業者の不在 など
機会	脅威
<ul style="list-style-type: none"> ● スポーツの価値、役割等の拡大、地域課題解決の手段、SDGs推進の手段としての期待 ● スポーツ及びスポーツ施設の都市経営資源としてのさらなる活用ポテンシャル、企業協働の活性化 ● 「島根かみあり国スポ・全スポ」サッカー(成年女子、少年男子、少年女子)開催予定施設としての契機 など 	<ul style="list-style-type: none"> ● 人口(浜田市民、75Km圏内)の減少 ● 厳しい財政状況・自主財源 ● 高齡社会の進展 ● 全国的なアイススケート場の減少(持続的な経営の難しさ) ● スポーツ種目の多様化、志向の分散、アイススケートへの関心の薄まり など

▼施設活用類型と特徴・課題の整理

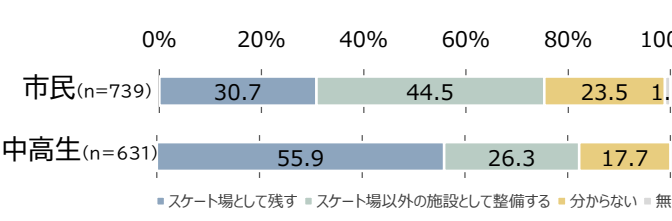
機能	主な用途/特徴・課題等
アイススケート場(単機能)	<ul style="list-style-type: none"> ● カーリング、フィギュアスケート、レクリエーションとしてのアイススケート利用が可能。 ● 通年での営業は想定しうるが、周辺同類施設の営業状況やこれまでの利用実績・収支を鑑みると、通年での営業は、利用者数に見合わない大幅なコスト超過が想定される。 ● 設備の老朽化にともない、大規模な設備更新投資が必要。
アイススケート場(ハイブリッド)	<ul style="list-style-type: none"> ● アイススケート機能に加え、他機能にも転換しながら使用するケース。 ● カーリング、フィギュアスケート、レクリエーションとしてのアイススケート利用に加え、他機能の施設種別に応じた利用が可能。 ● アイススケート場(単体機能)の設備更新投資等に加え、他機能利用(機能転換)のために必要になる施設設備投資が純増する。
体育館(板張り)	<ul style="list-style-type: none"> ● 体育館施設(板張り)として機能転用するケース。 ● 幅広い屋内スポーツ(バレー・バスケ・バドミントン・インドアテニス・フットサル・卓球・パラスポーツ・アーバンスポーツ等)のスポーツ種別での利用が可能。 ● 体育館利用としての設備投資が必要(床張り、空調等)。 ● 現行の市内体育館の需給状況に留意が必要。
屋内人工芝施設(人工芝)	<ul style="list-style-type: none"> ● 屋内人工芝施設として機能転用するケース。 ● 幅広い人工芝スポーツ(フットサル・サッカー・野球・インドアテニス・グラウンドゴルフ・アーバンスポーツ等)のスポーツ種別での利用が可能。 ● 屋内人工芝施設としての設備投資が必要(人工芝敷設、空調等)。概ね10年ごとの定期的な人工芝の張り替えが必要。 ● 現行の市内体育施設等との差別化を図ることが可能。
新たなスポーツ等空間(土間)	<ul style="list-style-type: none"> ● 既存のアイススケートリンクの基礎(土間)をそのまま活用して機能転用するケース。 ● コンクリート空間に適したスポーツ(スケートボード、BMX、インラインスケート等)のスポーツ種別での利用が可能。 ● 基礎の傷みを補修する最低限の設備投資、空調等の設備投資が必要。

④市民・若者の意向調査

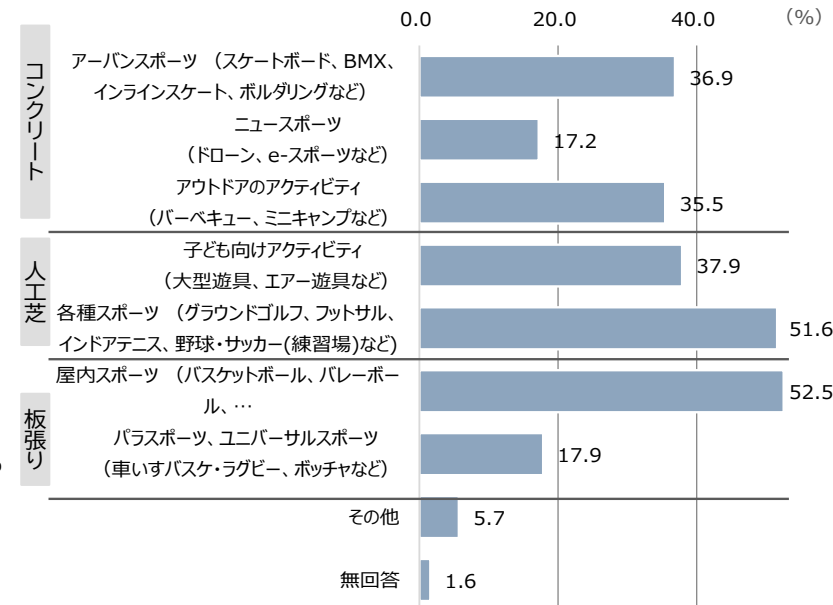
「サン・ビレッジ浜田アイススケート場の利用経験」
市民アンケート(n=400)



「サン・ビレッジ浜田アイススケート場の望ましいあり方」



「どのようなアクティビティ(活動)ができると良いか」
市民アンケート(n=505)



⑤利用団体・企業(運営事業者)等意向調査

「本施設の運営に関する事業者実感(民間事業者ヒアリングより)」

- アイススケート場の収益確保・利用者拡大のハードルは高い
- 現在の収支構造・利用状況や運営実績の不足から、アイススケート場の運営意向のある事業者は限られている
- 屋内運動施設への転用が望ましい
- 屋内運動施設の床面の設えとしては、板張りまたは人工芝が望ましい
- アーバンスポーツの専用施設として通年・常設で運営することは難しい
- 既存施設との競合には留意しながら、新たな利用シーンを生み出すことが重要である
- 屋内運動施設へ機能転用した場合は、施設運営へ参画意向のある事業者は多い

「本施設の運営に関する利用団体実感」

- 【カーリング】
- 利用者の増加に向けては、広域からの誘客や安定的な利用環境の確保(いつでも使用可能なカーリング仕様様の確保など)が求められる
- 【フィギュアスケート】
- 営業日数の増加や安定的な運営、情報発信(子どもや親世代への発信、体験プログラムの充実など)によって利用者の拡大が見込まれる

⑥サン・ビレッジ浜田アイススケート場の機能のあり方に関する考察(調査まとめ)

■ サン・ビレッジ浜田アイススケート場は、屋内人工芝施設として機能転用を図ることが望ましい
屋内人工芝施設と体育館施設の評価はほぼ同評価。事業化において民間活力がより発揮しやすい機能を選定することが肝要

比較の視点	アイススケート場	体育館(板張り)	屋内人工芝施設
①利活用シーンの広がりがあがるか	△ スポーツ種目が限られ、通年利用も非現実的	◎ 天候に左右されない様々な利用シーン	◎ 天候に左右されない様々な利用シーン
②子ども・若者の利用増が見込めるか	○ 大幅増加は見込みづらい	◎ 大幅な利用増が見込める	◎ 大幅な利用増が見込める
③市民(大人)の利用増が見込めるか	△ 大幅増加は見込みづらい	◎ 大幅な利用増が見込める	◎ 大幅な利用増が見込める
④交流人口の増加に寄与しうるか	△ 増加は見込みづらい	○ 新たな交流人口増を期待	○ 新たな交流人口増を期待
⑤施設競合・重複がないか	◎ 施設の希少性は高い	△ 市内に同類施設あり	◎ 屋内人工芝の公共施設なし
⑥運営事業者の関心・意欲があるか	△ 参加意向をもつ事業者不在	◎ 積極的な事業者が存在	◎ 積極的な事業者が存在
⑦ライフサイクルコスト(25年間)	△ 約9.0億円	○ 約3.0億円	○ 約3.4億円
利用料収入	235,000千円	207,500千円	207,500千円
整備費	▲ 191,000千円	▲ 157,000千円	▲ 143,000千円
大規模改修費	▲ 191,000千円	▲ 66,000千円	▲ 114,300千円
運営経費	▲ 750,500千円	▲ 288,000千円	▲ 288,000千円
(利用者数/年間)	(9,200人/年)	(36,600人/年)	(36,600人/年)

1. 公共施設の役割・機能(より多くの市民の利用、より多くの受益実感の提供)の観点

- 本施設の利用者数は直近では約5,000人で、浜田市民の利用は非常に限られている状況。
- 市外利用者が多く、若年層や子育て世代をはじめとする浜田市民のための施設として有効に機能しているとは言い難く、利用実態が伴っていない。市民アンケートからは用途転用の回答割合が高い。
- 公共施設の役割・機能の観点から、より多様な・より多くの人に利用される機能への転用が望ましい。

2. 経済効果・市財政負担・費用対効果の観点

- 本施設の集客効果が浜田市内に及ぼす経済効果は極めて小さい。機能転用により、浜田市の集客交流施設としての機能を高め、市外利用者、域内消費額の増加を促すことが期待される。
- 中長期コストは、屋内人工芝施設(体育館施設)として改修・運営する方が経済合理性が高い。
- 経済効果・市財政負担・費用対効果のいずれの観点からも合理性の高い、機能転用が望ましい。

3. 拠点性・目的性の観点

- 既存施設利用者の活動継続に対する(段階的・時限的な)フォロー・サポートなどの検討が求められる。
- 機能転用により、新たな拠点性・目的性の発揮が求められる。生涯スポーツの振興、健康づくりの推進、観光・交流の推進、人がつながる定住環境づくりの推進などにも寄与する拠点機能の発揮が必要。
- シーン拡充によるスポーツ振興を通じ、交流促進と関連ビジネスの拡大のシナリオが重要。

4. 施設経営の観点

- 若者・子育て世代をはじめ、浜田市民に親しまれ、市の生涯スポーツの振興、健康づくりの推進、観光・交流の推進、人がつながる定住環境づくりの推進などに寄与する自主事業の積極的な展開に期待。
- 市内関連施設と役割分担・連携をおこない、施設利用の目的性を高め、拠点性を創造していくことが不可欠であり、隣接するスポーツ広場との一体的な運営による利用の相乗効果も期待。

一年を通じて多様なスポーツ種目・レクリエーションなどに対応(全天候)する施設へ

- 浜田市内の既存スポーツ活動のより付加価値の高い活動フィールドとして
- 指定管理者が提供するアーバンスポーツ等多様なスポーツの体験フィールドとして
- 市民の多様なコミュニティの遊び・交流のフィールドとして
- 市外のスポーツ団体等の合宿、合同練習、対外試合などのフィールドとして